

Support for **Woman Doctors** ～私からあなたへ～

赤坂(旧姓 熊谷)真奈美 先生【岩手県 16期】

岩手医科大学 小児科 特任講師(小児神経)
整形外科の夫(自治医大の同級生、単身赴任)
長男高校2年、次男中学2年



「自治医大と私の出会い」

5年前の東日本大震災では全国の皆様、自治医大の方々から温かい支援をいただきました。この場をお借りして心から感謝を申し上げます。熊本の皆様も大変な日常とお察ししますが、必ずや共に復興しましょう。

岩手県のへき地代表、旧川井村で私は生まれ育ちました。貧乏な母子家庭の三女で、地元には高校はなく、しかし勉強だけは好きだった私に、中学の先生が“盛岡の高校へ行って、お金のかからない自治医大に入り医者になりなさい”と高校進学の特奨学金を3種類も整えて下さいました。また亡くなった父の担当医は自治医大出身の方でした。

金銭的に絶対浪人できない私のために高校の先生は他大学の医学部推薦や地域奨学生制度を進めて下さいました。しかし中学生の頃から自治医大のみを目標にしてきたので、誰にも相談せずすべて断りました。幸運にも合格できた自治医大は期待通り、すばらしい教育と意識の高い仲間達ばかりでした。また高校時代は切り詰めた一人自炊生活をしていた私にとって、大学の寮は、お風呂が準備され、食堂があり、勉強に専念できるありがたい環境でした。No76医燈会会報に、群馬39期の先生が、ネットーどん会と題し、寮に食堂がなく学生が毎日の食事に悩み、有意に健康を害しているという気になる記事を書いていました。私のように早い時期から自炊し、日々の家事が苦にならない人はレアで、多くの学生にとって毎日の自炊と部活と勉学の両立は容易なことではないでしょう。寮に食堂はあるべきだと私も思います。

義務中に自治医大出身で岩手県と同級生と私は結婚し、2人の男の子に恵まれています。子育てと仕事の両立は、大変さより人間としてのすばらしい経験が圧倒的に勝ると断言します。主人は最大の理解者だし、仕事で疲労困憊していても、子供達の世話をするとなぜか逆に元気になれるし、76歳の母は川井村から野菜を背負って

遠路バスでしばしば来てくれるし、皆の協力に感謝する毎日です。

同県同士の結婚は他県に比べると苦労が少ないとは思いますが、同級生である以上、義務中の勤務地は別々で、岩手は広いためほぼ別居し毎年のように2か所の引越をしました。長男妊娠時は診療所勤務で、そのまま出産するつもりでしたが、妊娠6か月時、小規模県立病院に転勤命令がでました。そこは常勤医が3人で、必然的に産休直前まで3日ごとに当直でした。次男妊娠時は超多忙な中核県立病院の1人小児科長で、外来、入院、緊急帝王切開立会、仮死児が生まれると自分が妊婦であることを忘れ、全力で走って蘇生に向かい、土日・夜間は救急呼び出しに対応し、やりきった自分をほめたい気持ちです。ひどいつわりで激やせした私と一緒に、おなかの中から激務を乗り切り、元気に生まれてきてくれた子供達は私の誇りです。義務年限は正直大変でしたが無事に果たせたことは自分自身の誇りです。

高校時代からの奨学金もすべて返済し、岩手医大小児科常勤11年目になります。義務終了後に大学を希望したのは、確実に複数の医師がいる事、勤務地が固定すれば引越がなく、地元で根差して子育てができる事、経験・勉強不足のまま地域に残ることが不安だった事などが理由です。現在当直は月に4回、担当の小児神経オンコールは月に半分以上です。複数医師がいてもなぜか呼び出される日々に変わりはありませんが、未来ある岩手の子どものために、私にできることをするのみです。

医師にも母にも私になれたのは、自治医大の存在と、多くの人々との幸運な出会いのおかげです。恩を返していく年齢になったと最近感じます。自分の経験や知識はわずかですが、惜しみなく後輩に伝えたいと思います。



後輩医師・学生へ一言メッセージ

『人のお世話にならぬよう、人のお世話をするよう、
そしてむくいを求めぬよう。』

(周囲への甘え過ぎには気をつけましょう。)

岩手の偉人:後藤新平医師)